

社
SHA

楽
RAKU

神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
全国有数の〈社史コレクション〉を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。

Vol.87

2020/08

85号の社楽で、お酒にまつわる社史の紹介「社史呑み」をお送りしました新人司書のHです。

西日本編が好評でしたので、引き続き空想の日本「社史呑み」で最終目的地の北海道を目指します。

○

前号の社楽では和歌山県まで進みました。今号は中部地方からスタートします。旅の再開は福井県。日本酒を造る一本義久保本店の『酒づくり百年のあゆみ』（2002年刊行）の紹介です。
「一本義」という銘柄は「領内屈指の素封家といわれた笠松家が代々勝山藩主の

愛育のもとに醸造していた銘柄「一本義」の銘を譲り受けた」もので、かつては「澤之井」という銘柄だったそうです。「一本義」は禅語の経典にある「第一義諦」（だいいちぎたい）からの出典。「最高の真理、優れた悟りの知恵を究めた境地」という意味があるそうです。

この社史で注目していただきたいのは写真を大きく用いた第一章「一本義の風土―奥越前の地より」。酒造りに必要な米や水にかかわる奥越前の自然の風景が、「霊峰 白山連峰」に始まり「豊穰の刻 黄金の稲穂」まで季節を追う形で紹介されます。酒づくりが地元の自然に支えられたも

のだとわかる、印象的な写真が目を引きます。章と章の間にはさまれるコラム「本に書かれた『一本義』も魅力のひとつ。藤田宜永著『愛の領分』の一節「あんたが推奨してた福井の酒があつたね」「一本義ですか」のように、小説やエッセイの中で登場人物が一本義と関わる場面が引用されています。

○

どんどん北へ向かいます。ワインを飲みに岩手県は大迫町へ。地元農協との共同出資に端を発するエーデルワインの『村田柴太が語るエーデル・ワイン物語』（2004年刊行）をご紹介します。

昭和37年晩秋、当時町長だった村田柴太は岩手県の霊峰「早池峰の高山植物であるハヤチネウスユキソウとアルプスの名花エーデルワイスがよくにていることから」外務省を

社史呑み

東日本編

（裏面へ続く）

(表面から続く)

通じて「姉妹都市のプロポーズ」をします。昭和40年にオーストリアのベルンドルフとの姉妹都市締結が実現し、43年からは「社員をワイン造りの本場、オーストリアの歴史あるワインスクールに次々と送り出し技術を習得させ、品質を誇るエーデルワインの礎」としているそうです。エーデルワインという名前の由来も、エーデルワイスとの語呂合わせ的発想から。エーデルにはドイツ語で「高貴な」という意味があるので、「エーデルワイン」とは「高貴な酒」という意味になるそうです。

名残惜しいですが、最終目的地の北海道へ。ご存知「マッサン」こと、創業者竹鶴政孝が昭和9年に余市に工場を建てたニッカウキスキーから『**ニッカウキスキー80年史**』(2015年刊行)です。

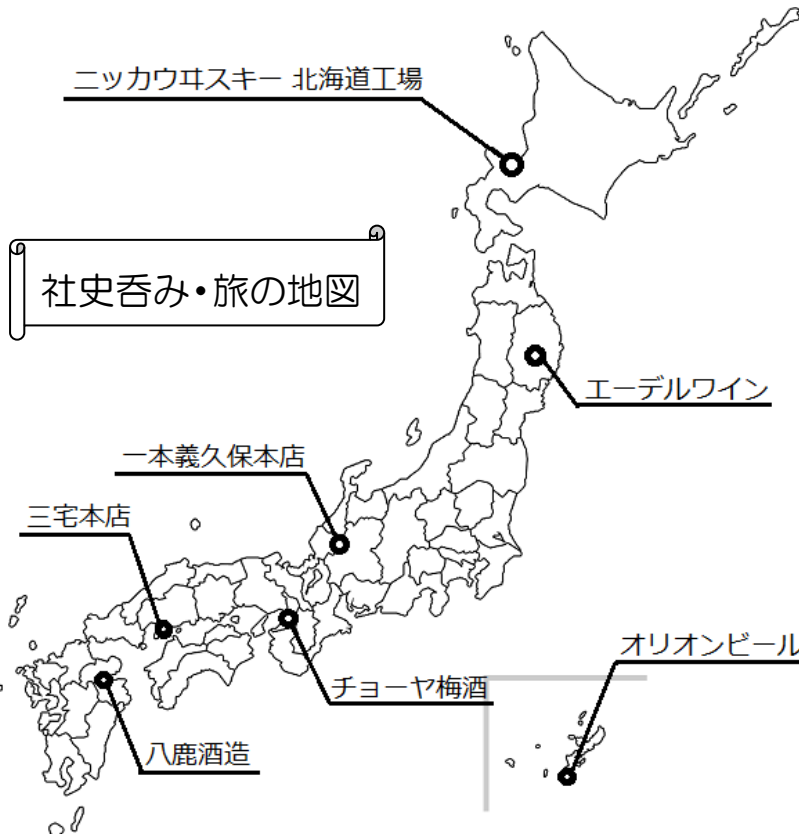
ブラックニッカのアイコンとして広く知られる「ヒゲのおじさん」こと「King of Blenders」は、竹鶴政孝の哲学のひとつである「ブレンドの大切さ」を象徴しているそうです。

このアイコンの代表格ともいえるススキノ交差点のネオン看板は、昭和44年からリニューアルや改修を重ねて現在三代目。「すすきのビルの設計者がニッカ愛飲者の会に入っており、ビルを設計する段階でニッカの広告看板をつけることを前提としたビルデザインを行った」そうです。代を重ねるごとに少しずつおじさんの顔がアップになっているという事実も、この社史を見れば分かります。

あつという間の旅でしたが、いかがでしたでしょうか。穏やかな日常が戻った際には、ぜひ当館の社史室で空想旅行をお楽しみください。酒造メーカーからの社史のご寄贈も、随時お待ちしております。

※尚、社史は貴重な資料ですので、実際に飲食をしながらのご利用はお控えくださいますようお願い申し上げます。

(企画情報課 堀田)



★社楽85号の西日本編も併せてお楽しみください。

●問合せ先 神奈川県立川崎図書館 企画情報課

213-0012 川崎市高津区坂戸 3-2-1 かながわサイエンスパーク 西棟 2F

電話：044-299-7826 FAX：044-322-8878

<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>